

○人物登場：松波龍一氏(松波計画研究所代表)

インタビューの前に、別荘を持つバリ島の話で盛り上がる。年に何回か気が向いたときに訪れて、バリ島での生活を楽しみ、英気を養ってくる。ゆったりした時間の流れと異文化に浸る心地よさがたまらないようだ。

☆ これまでの足跡

生まれ育ちは松山で大学から東京へ。東大闘争の最中で、大学の産学官協働に異が唱えられ、当時都市工学科助手だった土田旭氏が大学を辞めて1970年に都市環境研究所を設立。まだ都市計画系のコンサルが少なかったので、行政や住都公団等からの仕事が集中。

広島市の都心基本計画を皮切りに筑波研究学園都市のマスタープラン作り、広大移転の賀茂学園都市計画等。学生アルバイトとして手伝ううちに正規社員となる。

広島県から市街地整備基本計画の受託を機に、広島に出先を置くこととなる。地域主義を唱えていたこともあり、東京に見切りをつけて81年に広島に移り住む。89年からは湯来町へ、現在に至る。

☆ まちづくりの仕掛け人

都市環境研究所の広島事務所長として広島との関わりを深めていくが、代替わりも必要だし、そろそろ自分のペースで自分の好きなことをやりたいという思いが強くなり、94年に個人的な事務所、松波計画研究所を設立。

広島市を中心に中四国地方における都市開発の推進、都市基本計画の立案に携わる一方で、中山間地域での地域づくり活動にも精を出す。オープンカフェや雁木組、ポップラ・ペアレンツ・クラブ等、広島のまちづくり関連の団体の仕掛け人である。

特に、平和大通りにオープンカフェを作ろうという活動は印象深い。平岡市長時代、平和大通りの再整備計画に携わり、魅力的なオープンスペースにするためにオープンカフェができないか議論した。その後、関係者が集まって研究会を開き検討したが、道路上に作るのは法制度的に難しいという結論に達し、まずは機運を盛り上げるための運動を起こそうという主旨で95年にカフェテラス倶楽部を設立。翌年には青年会議所主催の広島文化デザイン会議の一環として平和大通りに「オープンカフェ・ナイト」を出店し、98年まで3回続く。更に98年には市の直営で本格的なカフェレストランをオープンさせ、市民の評判となる。99年から3年間は民間事業者へ委託したが、赤字のため打ち切りとなる。

その後、舞台は河川に移り、京橋川沿いでのオープンカフェに結実した。そのきっかけとなったJALシティとフレックスホテルでの先行的な取り組みについては、思い出が尽きない。

なお平和大通りのカフェテラス倶楽部は、現在も継続中である。

☆ 湯来里守機構とは

湯来町に来て25年が経ち、集落の組織「同行」の仲間入りもした。周囲は空き家や遊休農地が増えていくなかで、美しい湯来の里を守るためにNPOの湯来里守機構を昨年立ち上げた。空き家を放って置くのはもったいない。維持管理の世話と活用のお手伝いをし、対価をいただく仕組みで、現在2件成約している。そのうち1件は内部を改修して食堂を開業できるところまで来たが、まだ入居者が見つからない。これから営業に力を入れて10件ぐらい手がかけられれば、NPO活動も軌道に乗るであろう。その点、米国人のアレックス・カー氏は古民家を改修して古民家ステイの運営を日本各地で成功させている。地元の建築家やスタッフ等を上手に束ねるマネジメント力は見習わなければいけない。

☆ まちづくりライブラリーを是非

広島都市環境研究所をたたむ時に貴重な資料が残り、手元に保管しているが、どこかで共有できる場が欲しい。広島のまちづくりの歴史が分かるライブラリーがあれば、誰でも学べるし、そこから都市政策のシンクタンクにつながるかも知れない。



略歴：1947年愛媛県生まれ、1973年東大都市工学科卒、都市環境研究所入所、1982年同社広島事務所長、1987年同社代表取締役、1994年松波計画研究所設立、2013年NPO湯来里守機構設立

コメント 柔軟な思考の持ち主だ。日本焚火学会のような遊び心の集まりを主宰し、何事も楽しみながらをモットーに活動している。まだまだ天下のご意見番としてご活躍を！

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

第15号(平成27年1月15日)

○人物登場：石丸良道氏（セトラひろしま副理事長）

「本当に私でいいの？」と少し当惑。若狭理事長とタッグを組んで実務をこなしてきた石丸さんの苦労話を聞きたいということで登場を願う。最初は多少緊張気味だったが、得意の芸術論になると熱を帯びてきた。

☆ これまでの軌跡

生まれ育ちは広島で高校卒業後、新設の九州芸術工科大学へ。70年代前半は大学紛争の余韻が残る中、当時流行りのドロップアウトしてヨーロッパへ。物価が安く生活しやすいスペインでアパート暮らしを始め、独学で絵を習いながら5年間過ごす。

日本に帰ってきて生活に馴染めず、元祖フリーターとしていろいろアルバイトしながら今に至り、セトラの活動のためにアルバイトしていた感がある。昨年4月にやっと定職につく。

☆ 大イノコ祭りについて

1990年にスタートした「大イノコ祭り」のきっかけは、当時発足した中国地域づくり交流会のテーマの一つとして「手作り公園研究会」を加藤新氏が立上げ、リニューアル時期と重なった袋町公園でなにか祭りをやろうという話になる。馴染みのある亥の子祭りを現代風にアレンジしたのが今の大イノコ。1回目は研究会が主催したが、2回目以降は並木通り商店街が中心となって実施。7回続いたが、バブルがはじけて寄付も集まらなくなり中止。何のための祭りなのか、挫折を味わいながらも、祭りが自分の主テーマとなる。

アベノミクスの追い風で経産省からの補助金が広島市中央部商店街振興組合連合会（中振連）に認められ、2013年に17年振りに大イノコを復活し、昨年も実施したが、今年は小休止の予定。補助金頼りからの脱却を図らなければ先が見えてこない。

☆ これからの目標は

2006年に岡本太郎の「明日の神話」を旧市民球場跡地に誘致する会が発足したが、その流れを広島文化会議準備会が継承して、エマニュエル・リバ展（2008年）、新藤兼人百年の軌跡（2012年）、等のイベントを実施。また世界に開かれた球場跡地にグローバルな文化が発信できる「明日の広場」を実現させる運動を展開中である。

当面の目標は大イノコ祭りが継続できる環境を作ること。今回祭りを担いたいという若い人たちが「市民の会」を作り、クラウドファンディングに挑戦した。市民の会を大きく育てなければ次なる主催母体になりうる。NPOはテーマや趣味により地域を超えて集まるコミュニティ。地域の地縁を軸としてNPOをうまく結束させれば、「とうかさん」や「えべっさん」のような持続可能なイベントができる。

☆ Co-eX（コ・エックス）とは

祭りやイベント等の企画が好きである。Co-eXとは、コラボレーション（協働）とエクспанション（拡散）の緊張感あるセッションの形。ヒロシマが要請する未来の地球文化の表現スタイルと考えている。異ジャンルのアーティストが場を共有し、対立しながら即興的に表現していく。演出的な上からの視点ではなく、相手の反応を見ながらみんなで作っていく。

祭りも演劇や公演と違って、準備はするけどぶっつけ本番なのでCo-eXに近い。まちづくりもいろいろな要素が組み合わさっているので、Co-eXといえる。Co-eXの実験が好き。

☆ 「無いという過去」を持つ広島



略歴：1951年広島生まれ、九州芸術工科大学中退、5年間スペイン在住、1976年帰国、2003年セトラひろしま副理事長、2014年中振連事務局長

1945. 8. 6の「ヒロシマ」は人類史の特異点。新しく人間の条件が変わったという意味で「グラウンド・ゼロ（基点）」であり、歴史の起源である。「ゼロ」は「無い」という存在だから、広島には「無いという過去」がある。この過去に対峙しなければいけないが、引きずり回されてもいけない。

コメント 独特の芸術論、歴史観は長年の体験の中から培われたものであろう。アートとまちづくりの融合にチャレンジし続ける姿にエールを送りたい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

第19号(平成27年9月15日)

○人物登場：杉川 聡氏 (マリーナホッププロパティ代表取締役会長)

会社のトップとして第1線でバリバリ活躍されている人に初めて登場してもらおう。取材の趣旨をよく理解されており、杉川さんがこちらの質問を誘い出すように淀みなくスムーズに進行した。



略歴：1957年広島生まれ、1980年慶応大学卒、信用金庫入社、1981年第一ビルサービス入社、1985年同社長就任、現在に至る

☆ これまでの軌跡

生まれ育ちは広島で高校卒業後、慶応大学へ。卒業直前に結婚し、信用金庫に就職したが、妻の父親（第一ビルサービス社長）にガンが見つかり、懇願されて23歳で義父の会社に入社。27歳の時、義父が亡くなり社長を引き継ぐ。

人材を派遣するビルの維持管理業務がメインの会社。引き継いだ当時は建設ラッシュと役所の庁舎管理の外注化により急成長していたが、1990年頃からバブルが弾けて頭打ちとなり、業務の拡大を考え始めた。

☆ 業務の拡大

維持管理業務は建物の寿命とともに終わるが、顧客のニーズに対応して20～30年経つと入居率の低下を防ぐための用途変更や40～50年経つと建替えの要望等に応える不動産管理業務に軸足を移す。

会社創立50周年（2013年）を前にして、何か新規企画を！と思っていた矢先に広島マリーナホップ再生の話が飛び込んできた。結果として50周年記念事業となる。

☆ マリーナホップの経営を引き継ぐ

マリーナホップは2005年に開業したが、2008年に経営不振で当初の事業主が撤退し、次の事業主が変わったが再建できず、2012年に第一ビルサービスが経営を引き継ぐ。

当社の事業規模から見て、経営を引き継ぐことはリスクが大きく、どの銀行からも反対されたが、失敗したら個人資産を注ぎ込む覚悟で融資を受けた。

今では再生も順調に進み、宮島航路の新設、ペット連れで買い物できるペットモール、海を望める展望台、遊覧船の運航等を整備し、来場者数・売上高ともに伸びている。近々、都市型の水族館を整備する予定。これまでの家族連れを中心とした子供の遊園地のイメージから大人も楽しめるアミューズメント・パークを目指している。

☆ 広島まちづくり推進協議会

マリーナホップを引き継ぐ時に広島まちづくり推進協議会を発足させ、毎月1回仲間が集まってテナント誘致やイベント等の情報交換を行っている。マリーナホップの再生もあるが、広島のみちを支えるというスタンス。地元の中企業がここの再生をやりきれるか否かは一つの試金石となる。これからは隣接する広島西飛行場跡地の開発の動きもあり、広島南道路以南のまちづくりについて、この協議会をベースにエリア内の事業者や専門家、行政の人にも声をかけて観音新町活性化委員会を立ち上げたいと思う。

☆ これからの目標

マリーナホップは観光地ではないが、観光中継地にはなれる。広島の観光は世界遺産の原爆

ドームと宮島で持っているが、後2～3時間滞在が伸びれば、広島泊のコースが組めるという。駐車場・土産物店・食事処が整っていることが観光地の条件とされるが、ここはそろっている。原爆ドームと宮島の中継地として、食事を取り、水族館を見て、買い物をして3時間は過ごせる。海の見える立地を最大限活かして、ここと飛行場跡地を一体的に整備できれば、テーマパークも夢ではない。息子が後継者として戻ってくれたので、子や孫のために広島のまちを良くしておきたいという気持ちが強くなった。

コメント 「マリーナホップはお祖父ちゃん達が作ったんよ」と孫に自慢したいがためにやっているようなものという最後の言葉が余韻として残る。

広島のプロランナーとしてリスクを恐れず、果敢に立ち向かっていく姿勢に共鳴した。後続のランナーが次々に現れて広島のまちが変わっていくことを期待したい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

第21号(平成28年1月15日)

○人物登場：渡部朋子氏 (ANT-Hiroshima 理事長)

マスコミ等にもよく登場されており、事前の情報収集で渡部さんの全容が掴めたような気がしていたが、やはり会わなければ伝わらないことが沢山あると感じた。

☆ これまでの軌跡

被爆2世として広島に生まれ育つ。大学の卒論で被爆の実相「ヒロシマ」をテーマに取り組み、恩師の言葉「仲間と共に大地を這(は)う」に共感。学生時代にNGOを知り活動に参加して興味を持つ。卒論に対する先生のコメントは「ヒロシマの内と外に橋を架けることができるかもしれない」。これらのことが現在までの活動のベースとなった。

☆ ANT-Hiroshima とは (注：NGOとは非政府組織)

平和都市・広島を拠点とし、国際協力活動・平和教育活動・平和文化交流などを行なうNGO。ANTには「アリ」と「Asian Network of Trust」(アジアの信頼のネットワーク)という2つの意味が込められていて、1人1人の力は小さくとも、信頼のきずなをベースに、国内外の人びと・NGOなどと協働することで大きな平和を実現できると信じて、様々な事業を展開している。

主なものの1つに「Sadakoの絵本プロジェクト」(国際平和事業)がある。原爆の影響による白血病のため12歳で亡くなった広島の少女、佐々木禎子さんの生涯と彼女の同級生たちが行った「原爆の子の像」の建立運動について描いた絵本「おりづるの旅」をダリ語・英語・ネパール語・タガログ語など20ヶ国語に翻訳し、平和への祈りを込めて、紛争地を中心とした世界各地に届けている。この絵本に影響を受けたパキスタン人アーティストのファウジア・ミナラさんと現地で出版した絵本「Sadako's Prayer」もアフガニスタン・パキスタン等で読み聞かせしながら配布している。紛争や自然災害で苦しむ子ども達に希望と勇気をもってもらえると嬉しい。(参照：NPO法人ANT-Hiroshima ホームページ <http://ant-hiroshima.org>)

☆ グリーン・レガシー・ヒロシマ

2011年7月にスタートした「グリーン・レガシー・ヒロシマ」(Green Legacy Hiroshima)は、国内外に被爆樹木の存在と意味を知らせ、その種や苗を届けるという活動を通して、世界中に「平和・希望・共生」のメッセージを発信し、命について考える場をつくることを目標としている。広島は極論すれば大きな墓場。その上に育った樹木は被爆者の命を受け継いでいる。



略歴：1953年広島生まれ。1976年広島修道大学卒。1989年に「アジアの友と手をつなぐ広島市民の会」を設立。2007年特定非営利活動法人「ANT-Hiroshima」に改称し、理事長となる。

被爆樹木と出会うことで、被爆者が語るのと同じくらいの何かを感じてもらえると思う。木の嫌いな人はいない。木は新鮮な酸素や爽やかな風や光や木陰を提供し、無償の愛を与えてくれる。被爆樹を中心まちを再構築するのも面白いのではないかな…。

☆ まちに対する提案等

過去を捨てて未来は作れない。 これまで国際平和文化都市を目指してきたが、被爆 71 年からは新しいミッションが必要。今は目標が漂流しかけているので、皆で議論してビジョンを練り直す時期にきている。そのために被爆後の復興の過程を若い人に正確に伝えることが大切。音楽・建築・アート・経済など各分野の広島のマチの歴史を市民の視点で紐解き、世界の人に見てもらえるようにしたらよい。

広島は土徳のある地。 「平和では飯が食えぬ」と切り捨てて、その世界の素晴らしさと可能性を自ら閉じている政財界の人が多い。世界の大半の民衆はヒロシマに平和への思いを寄せており、その思いに応えれば世界から沢山の人が集まってくる。来訪者がこの地に立ち、この地の人と触れ合い語り合えば、必ずまた来てくれる。

基町は大いなる挑戦の場所。 基町は高層アパートができたことだけで復興したとは思わない。基町小学校は外国籍が過半で、良い教育がされている。国際色豊かで多様な人びとが共生した文化が華開けば、世界のモデルとなり、本当の意味で広島戦後が終わったと言える。

* コメント *

人と人との信頼を深め、その輪を広げて夢を叶えられる人だ。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

第 2 2 号（平成 2 8 年 3 月 1 5 日）

○人物登場：石原悠一氏（アーティスト）

取材の前日まで 11 日間、カンボジアで子供たちとの交流活動をしてきたが、旅の疲れも見せずハツラツとした顔でインタビューに応じる。

☆ これまでの軌跡

広島に生まれ育つ。大学卒業後、高校の教員となったが心が満たされず辞職。悶々とするなか絵の世界に入る。体にハンディキャップのある人たちとの関わりから広大な特別支援教育特別専攻科を経て、県の特別支援学校教員となる。絵やライブペインティングの依頼も増え、教員生活 4 年間を一区切りとしてアーティストの道を選択する。

☆ アーティスト活動

各種イベントでのライブペインティングパフォーマンスや壁画制作の依頼も多く、マリーナホップの駐車場やグリンピアせとうちのビーチ施設など多数実績あり。また子供の想像力や表現力を育みたいという思いから、子供が自由に表現できる創作活動の場を提供している。

☆ 大イノコ祭り

国の補助金により復活した大イノコ祭りは、広島市中央部商店街振興組合連合会などが 2013 年から 11 月初旬に中区の袋町公園で開いている。第 1 回と 2 回の大イノコ祭りは出演者として協力したが、昨年の第 3 回は総合演出という役割を担う。昨年からは補助金に頼ることなく、若手のエネルギーと経験豊富な方々が力を合わせることでやり遂げることができた。

・大イノコで学んだこと 地域の人との人間関係を耕すことの大事さが肌身に染みた。例えるなら駄菓子屋にある割り箸についた水飴のようなもの。水飴を白くねって美味しく食べるには、力と勢いだけでは上手くいかない。温まり具合を丁寧に計りながらゆっくり根気強く力を入れ続け、徐々に柔らかくなったところで白く練っていく。祭りも同じ。



略歴：1982 年広島生まれ。2004 年岡山理科大学卒。高校教員。2007 年広島大学特別支援教育特別専攻科卒。特別支援学校教員。2011 年フリー、アーティストの道へ。

袋町公園は市民に開かれた公園であると同時に地域住民の憩いの場である。都市化した新しい祭りは、地域の人を中心にして、居住地と無関係な有志の人々がサポートする体制作りが基本。今年から袋町小学校のPTAの方も企画会議の段階から参加してもらうことになった。祭りにおける総合演出の要諦は、各人に合った「**その人が輝ける役割**」を見つけることである。そのためには互いの人となりを知るところから始まる。

・**祭りとイベントの違い** 祭りは金儲けが主目的ではない。地域をまとめる有効なシステムであり、儲けの有無に関わらず**やるべきこと**である。祭りには地域の活性化、人間としての抑制からの開放・生きる喜び、自然への敬意・畏敬の念を感じさせる効果がある。やり続けることにより世代間の伝承が可能となり、相乗効果が生まれて**まちづくりの核**となりうる。

・**球場跡地で可能か** 現在は大型スポンサーがイベント会社を使って段取りをするので、地域の人との関わりが薄い。出店する人もイベントに参加する人も客でしかない。地域を耕す効果が弱く、祭りではなくその場限りのイベントで終わってしまう。

もし大イノコ祭りを市内の各団体に呼びかけて、みんなが協力できれば可能かも知れない。広い空間に大イノコのモニュメントが立ち上がれば、シンボリックで感動的なものになる。

☆ アートとは

「自分が見聞きし、学び、考えたことを心の中でろ過し出力すること」と定義。特に**思想と表現**を扱う分野。祭りにおいても、みんなの思いを整理・編集するのは思想を扱う立場であり、それを適切な方法で伝達するのは表現の分野である。大イノコ祭りでは自身が編集者であり、伝達者であると意識して振る舞った。

☆ これからの夢

将来の夢とは別だが、当面の目標としてアートの世界で有名になること。有名になれば発信力が高まり、多くの人に思いを伝えやすくなる。また、金が自分に集まれば、自己責任において子供たちや地域を耕すために使うことができる。

もっと自身の思想や表現力を高めて社会に貢献していきたいと思っている。

コメント 久しぶりに志の高い若者に会って心が洗われる気がした。是非球場跡地で新しい市民の祭りを実現して欲しい。 聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）